



七本松



会長に就任して

会長 L 中川 顯

第四十二代木之本ライオンズクラブ会長を
拝命致しまして、一言挨拶申し上げます。

この伝統あるクラブ会長という大役を、浅
学非才の私がお受けさせていただきます、
会員の皆さんはとも心配な事とは存じま
すが、昭和六十一年入会以来、多くの会長は
じめ幹事さんその他多数の会員の方にお世
話になり、今日がある事を思うと少しでも
恩返しが出来ればと思ひ、我が身を省みずお
受けさせていただきます。
本年度の会長方針と致しましては、次の三
つの目標を上げ、謳い文句だけではなく、少
しでも実行し実績を上げたいと思ひます。

- 第一目標：例会出席率の向上
第二目標：会員の増強
第三目標：四十周年記念事業の管理
以上の会員としてごく当たり前の事です



幹事の任務を終えて

幹事 L 石田 宏

昨年の六月彦根キャッスルホテルで開催さ
れた、「新旧合同幹事会」の席上、一年間努め
られた七Rの各幹事のスピーチには、「ヤレヤ
レ」の安堵感に満ち溢れ、またこれから二年間
任務に就く新幹事には、少なからず不安と
期待が交錯したスピーチであったことを、思い
起こします。

私は経験年数も浅く幹事の職責を拜命致
しましたが、木之本ライオンズクラブは四十
年の歴史を持つクラブであり、その幹事とし
て先輩諸兄が培われた歴史と伝統に恥じる
ことの無いよう微力ながら努めようと思ひ、
公式行事はすべて出席し、人との交流を図ろ
うと心掛けて各会議及び懇親会に臨みまし
た。

特に年四回の幹事会は、同じ役職のメンバ
ーが運営面の悩み等を持っておられる事に共
鳴し、連帯感のある会議でした。
また、地区三役セミナーでは、心得を教え
て戴きましたが、会長のカバン持ちとしての
任務を第一と解釈して務めさせて頂きました。
連絡調整を怠りがちで皆さんには礼を失す

が、これを確実に実行する為には、第二の例会
出席の事では会員の皆さんの自覚と協力を
お願いするより仕方の無いことですが、特に
計画委員長の中村さんに楽しい例会創りを
お願致します。

第二の会員増強の事は、毎年云われている
事ではございますが、もつと前向きに進めて
増強キャンペーンと致しまして、特別委員会の
設立を提案したいと思ひます。会員委員会の
方だけでは少数でもありますので、委員長さ
んを軸にして十名程度の委員さんの選出を
行ない全員参加で多数の会員の増強を狙い
たいと思ひます。

第三の管理の方ですが、立派なふれあいの
森が出来ましたが、これを完成品として維持
管理するのではなく、嫌な除草や清掃作業
をもつと発展的に楽しみながら管理が出来
るよう、具体的には記念事業委員長主催のバ
ーベキューパーティーや○○さん主催の花見や
会員同士がふれあい楽しみながら管理が出来
て行くような利用の仕方を地域社会に提
案できたらと思ひます。

この企画は、湖北の地域性を十二分に發揮
し、竹生島の川鶴の被害等、環境面のアプロ
ーチもあり、その後の川鶴の駆除にも一役を担
つたことは大きな成果であったと思ひます。
一方、会員拡大を地区セミナー・諮問委員
会等いろいろな機会でも取り上げられており
ますが、当クラブも今後、目標を決めて取り
組んでいく必要があると思ひます。現在の
会員数より少なくならないように努めると
共に、新たなメンバーの発掘も重要な事業の
一つと思ひます。クラブ運営の最重要テーマで
あります。

本年度のメインイベントCN四十周年の記
念事業は、従来の事業から方向性を変えて
考へて欲しいと橋本会長の事業方針を受け、
正副実行委員長・部長・部会長の皆さんは当
初より会議を重ねられ、ふれあいの森は今の
うららの計画を実行され、本年度より従来の
事業とは、違った事業展開をされております
が、今後継続されて行く中で、地域の方々に
活用され、またメンバーも憩いの場として楽し
んで頂けるような環境づくりを切望し、年数
回の奉仕作業も楽しみながら参加したいと

新入会員の紹介
L 田中俊之君の紹介



田中俊之君の紹介をさせていただきます。

彼は故L 田中通夫氏の御長男で、御商
売の(有)丸忠をつがれ、現在代表取締
役でいらっしゃいます。又、御商売関係の食品
衛生協会伊香支部の理事、木之本町商工
会理事等も努められ、中広く活躍されて
おられます。

子供の頃からスポーツには特に親しま
れ、子供達のスポーツ少年団には、熱心
に指導者として活躍されてきました。教

挽歌 故L 谷口安志を偲んで

L 田中 茂樹



安っさんと呼ばせて貰おう。かの人と
なりを一言で問われれば、「優し過ぎ
る人」と答える以外に適当な言葉が見付
からない。誘えば決して拒みはしない。
むしろ積極的にさえあった。様ざまな体
験を楽しんだものだ。品行は模範だつた
とは取って置けない。このパワーはリラク
ゼーションの場だけではなかつた。むしろ
経営の本質にこそ投影されていたので
ある。家族をこよなく愛し社員をおもん
ばかり、一方これら多くの人々から慕わ
れていたろうと想像するに難くない。こ
のなかであつて多くの親しい友人にとり
囲まれ、早過ぎる死ではあつたが凝縮さ
れた人生だつたと信じて疑わない。多く

二〇〇四〜二〇〇五中の退会者

- L 林 源栄 (十二月三十一日)
十六年四月入会
L 谷口安志 (五月八日) (ご逝去)
昭和四十八年十一月入会
L 安達 勲 (六月三十日)
昭和五十八年六月入会
L 山根 悟 (六月三十日)
昭和三十九年 (チャーターメンバー)